

Title	<特別エッセイ> Ⅱ. 大阪大学大学院・文学研究科の 玉井教授のご同僚の方々より
Author(s)	
Citation	Osaka Literary Review. 48 p106-p.126
Issue Date	2010-03-24
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25338
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

II

(大阪大学大学院・文学研究科の玉井教授のご同僚の方々より)

強い責任感と適切な助言

大庭幸男

諺に「光陰矢のごとし」とあるように、月日のたつのは早いもので、あの若々しい玉井 暉先生が今年度限りでご退官になられます。玉井先生には、公私ともどもたいへんお世話になり、心より感謝申し上げます。

玉井先生は、1983年4月1日付で和歌山大学から大阪大学に配置換えになられたと思います。実は、私も同年に山口大学から大阪大学に配置換えになりました。もちろん、玉井先生は文学部でしたが、私の方は言語文化部でした。したがって、その当時、玉井先生とはそれほど密な接触はありませんでした。恐らく、年に一度の入学試験採点時にお会いする程度だったと思います。しかし、玉井先生がそれまでお勤めになっておられた和歌山大学にはたいへん縁があり、大阪大学にきた初年度から数年間、同大学の非常勤講師を務めました。私は生まれも育ちも九州は福岡育ちですし、大学院修了後には山口大学に勤務しましたので、関西地方には何の縁もゆかりもありませんでした。ただ、たまたま大学院時代の同僚が和歌山大学に勤めていましたので、たいへん心強い思いをしました。そのこともあり、週に一度の和歌山大学への「旅」は、「楽しい思い」でしておりました。

玉井先生と本格的にお付き合いさせていただくようになったのは、私が1991年4月に文学部に配置換えになってからです。それまでは、英語学研究室には成田義光教授と河上誓作助教授がおられました。そのうち、成田先生は定年を待たずして関西学院大学にご転出されましたので、その2年後に

先生の後任として私が文学部に異動することになりました。河上先生には、大学時代の恩師であったこともあり、それ以後、本当にお世話になりました。

私が文学部に移りましたときは、英米文学研究室には藤井治彦先生、石田久先生、そして玉井先生がおられました。したがって、玉井先生とはおおよそ18年間もの長きに渡ってお付き合いをさせていただいたこととなります。その後、森岡先生が奈良女子大学から配置換えになられました。また、藤井先生、石田先生、河上先生の後任として、服部典之先生、片渕悦久先生、岡田禎之先生がご着任になられ、現在の英米文学・英語学の教授陣になっています。

英米文学、英語学研究室の特徴は、「英文科」としてまとまっていることだと思います。他大学では、英文学と英語学が別々になっていて、お互いに交流のないところが多くあります。しかし、阪大の英米文学、英語学研究室ではそのようなことはなく、英文科としてまとめ、ガイダンス、オリエンテーション、コンパ等の実施はもちろんのこと、*OLR*の刊行や阪大英文学会の開催なども協力し合い行っています。これは、全国的にみても、たいへん珍しいことではないでしょうか。特に、この結束のよさを象徴的に示しているのは、阪大英文学会だと思います。年に一度開催される学会ですが、英米文学、英語学の専門分野を問わず、毎年多数の同窓生の方々が参加されています。

阪大英文学会については、藤井先生、石田先生、河上先生の時代から、玉井先生が一人で会議開催に関する資料作成、企画等をご自分の使命のようになさっていました。そのお陰で、皆様もご存知のように、玉井先生が会長に就任された時に、阪大英文学会叢書が刊行されるに至りました。玉井先生の阪大英文学会への情熱は、傍にいとひしひしと感じられます。どうしてもそのような情熱を玉井先生がお持ちであるのか、機会があれば是非お聞きしたいと思っています。

このことと若干関係がありますが、私は常日頃、玉井先生はたいへん責任

感の強いお人柄だと思っています。どちらかという、いろいろな仕事を他人任せにするのではなく、すべてお一人でされるのが性にあっておられる方だと思います。種々の学会等では、すべてお一人で計画・準備や事務手続き等をされ、私たちはその報告を聞くのみでした。もちろん、我々が頼りないということもあるでしょうが、何かお手伝いをしようと考えても、先生の性格に鑑みて、実はあまり差し出がましいことは控える方がよいという判断もありました。

また、玉井先生は「いつも」と言っても過言ではないくらい、的確な判断をされる方です。河上先生が定年退官されるまで、私は英語学研究室の運営や学生の指導等について何の心配もしておりませんでした。いわば、先生の傘の下で、研究室のことにあまり頓着せずに過ごしておりました。しかし、河上先生が退職されてからは、ときどきどうしたらよいか分からないときがありました。たとえば、学生の教育指導のこと、英語学研究室の運営のこと、また、これは済んでしまったことですが、大阪外国語大学との統合のこと等について幾度となく相談させていただきました。そのような時には、玉井先生はきちんと話を聞いてくださり、いつも的確な解決策を提案していただきました。本当に心強い思いをしたものです。

弘法大師の言葉に「それ境は心にしたがって変ず。心けがるときはすなわち境にござる。こころは境をおって移る。境しづかなるときはすなわちこころ朗らかなり。心境冥会にして道德はるかに存す。」というのがあります。玉井先生が、いつもの確なご判断をされるのは、ご家族を含めて周りの環境と玉井先生の心が見事に調和しているからだと思います。つまり、静かな落ち着いた環境にいらっしやるので、こころも自然と落ち着いてきて、的確な判断がおできになるのだらうと思います。

玉井先生がご退官されることは、私たちにとってたいへん痛手ではありますが、私たち皆で力を合せて英文科をさらに発展させなければならないと思っています。玉井先生、これまで英文科のためにご尽力いただきまして、心よ

り感謝申し上げます。

(大阪大学大学院・文学研究科・英語学専攻教授)

「感謝」の二文字

森 岡 裕 一

私の阪大文学部着任は1995年、阪神・淡路大震災の年である。以来、15年間、玉井先生には上司かつ同僚としておつきあい頂いてきた。その先生が今春、阪大を離れられる。山川先生、石田先生のご退官、藤井先生のご逝去と、さまざまな「お別れ」を体験した中で、玉井先生のご退職は私にとって、不思議な感覚を与える。もちろん、寂しさが無いわけではない。それ以上に、玉井先生のおられない英文科運営を考えた際、年長者であるわが身を振り返って不安感に圧倒される思いすらある。しかし、同時に、体を張って英文科のために努力してこられた玉井先生の営為をお傍で目の当たりにしてきた者としては、先生の不在を補って余りある「遺産」の数々を前に、これからも先生の敷かれた軌道上を歩めば道を踏み外すことはないとの安心感をついつい抱いてしまう。そんな甘えた考えを先生は歓迎されないであろうが、その思いは私一人のものではなく、英文科関係者の多くに共有されているのではないだろうか。

先生との出会いはいつだったのか。私が大学院一年生のころ、当時梅田にあった丸善の文学関係のコーナーで、たまたま先生にお会いしたのが、おそらく最初だったのではないかと思われる。なぜか玉井先生は私のことをご存じで気さくに話しかけて下さり、これもたまたま目の前にあったノースロップ・フライの『批評の解剖』を手に取り、このようなものは関心ないですかと聞いてこられた記憶がある。さりげなく後輩に基本文献を示唆しようとし

て下さったのか、あるいは、話のネタに適当な本を取り上げられただけなのかは不明だが、相手に不要な緊張感を抱かせず、どんな人間も拒絶しない温和な雰囲気は、新進の研究者としてご活躍中の当時から感じられ、それから30年たった今日まで変わることなく玉井先生の基本にある。

もう一つ愉快的な思い出がある。私は大学院修士課程を修了後、幸運にも文学部の助手を一年努め、その後、言語文化部教員に採用して頂いた。それを機に自動車通勤を思い立ったのだが、免許取得後ペーパー・ドライバー歴8年、急遽、中古車を入手しての大胆な決断だった。当時は泉北ニュータウンに住んでいて、隣人で知り合いのタクシー運転手の方に車の選定と、自宅までの運転指導をお願いしたのだが、帰ってから興奮のあまり、現在住んでいる東大阪までの単独ドライブという暴挙に出た。途中、急な車線変更などをしてトラックにクラクションを何度も鳴らされ、細い道では、端に寄りすぎてサイドミラーを倒してしまうなど実にスリリングな冒険だった。それから時をおかず阪大に車で通勤することにしたが、さすがに一人では恐ろしく、当時、同じ泉北ニュータウンの住人でもあり、阪大に非常勤で来ておられた玉井先生にナビゲーターをお願いしたのである。当日、先生の家に向かうと、玉井先生は大きな双眼鏡を用意され、阪神高速堺線、環状線、池田線と乗り継ぐ行程のあいだじゅう、双眼鏡でいち早く道路標識を読みとり、的確な指示を出して頂いた。今ひそかに顧みれば、他人の頼みごとを断れない優しい先生としては相当の覚悟で臨み、リスクを最小にすべく決死の思いで双眼鏡を握っておられたのではないかと思う。それから30年弱、頼りなかった運転技術も今では上達し、ときどき教授会のあとなど千里中央までお乗せすることがあるが、すっかりリラックスして助手席に座って頂いている（と思う）。それも、あの双眼鏡による助力のおかげと深く感謝している次第である。

英文科主任教授にはいろいろなタイプの方がいた。強烈なカリスマ性を漂わせた先生や古き良き帝国大学時代の雰囲気を引きずった先生などそれぞれ印象的であった。玉井先生はそのいずれとも違う。一番の特徴は、大学内、

学会その他で要職に就かれながら、自ら汗をかき働く姿勢を最後まで貫かれたことであって、これは普通の人間にはなかなか真似はできない。嫌な仕事を他人に押しつけたり、他人に厳しく自らに甘い人間は多数いるが、玉井先生のように主任教授から助手までの仕事を一人で黙々と引き受けて手を抜くことのない方は見たことがない。しかも、玉井先生はなにごとにおいても慎重かつ粘り腰である。私のようにせっかちな人間からすると、ときとして先生のスタンスは時間がかかりすぎると感じられることもあったが、結果的には確実にことを処していられる玉井先生に反省させられることが多かった。これは、つまり、世の中とか人間性に対する洞察力をお持ちだということであり、その意味で文学研究を実生活において実践されていたといえる。私もふくめ研究知見と実生活の切り盛りが必ずしも一致しない人間にとっては得難いお手本を示して頂いたという思いである。

玉井先生は温厚な人柄ゆえに一見すると地味とも見える面もあるが、その業績たるや、あらためて振り返ってみると目覚ましいものがある。ご自身の学問的業績は言うに及ばず、日本英文学会を始めとする数々の団体での要職、阪大校内、文学研究科内での重責、日本英文学会関西支部立ち上げ等のことについては周知の事実であろう。外大との統合を機に文学環境論コースが成立したのも玉井先生のご努力なしには語れない。英文科に限ってみても、談話会の充実化とシステム化、院生の管理業務登用、留学支援、阪大英文学会の充実と阪大英文学叢書刊行など枚挙にいとまがない。さらに、英米文学専攻で課程博士が続々と出始めたのは玉井先生が本格的に指導力を発揮されてからであり、これほど見える成果をあげられた方は稀有な例だと思う。

アカデミックな研究、学会運営、学内行政、専攻の運営を同時に一人の人間がこなすことには困難を伴う。どれかが必然的に犠牲となるものである。玉井先生の場合、そのいずれにも渡りバランスよくこなされ、しかも、率先してことに当たってこられた。まさにノブレス・オブリージュである。先生の陰で快適な阪大生活を送らせて頂いた身としては、ひたすら感謝するしか

なく、せめて、今後いくぶんかでも恩返しができればと願うのみである。

(大阪大学大学院・文学研究科・英米文学専攻教授)

雇われ船長の述懐

服部典之

大阪大学英文科とも玉井先生とも長いつきあいになる。この二者との交流年月はほぼ重なる。私が大学3年で英文科の研究室に入り浸り始めた時、なにやら毎週来られてにこやかに話しをされる先輩らしき人がいたのを記憶するが、どうもこの方が玉井先生だったようなのだ。この人がまさか、博士後期課程に進学したとき阪大文学部に助教授で赴任されて私の先生となり、私が西暦2000年に阪大文学部に助教授で赴任したとき上司の教授になる方とは、当時20歳という若輩であった私には想像するよしもなかった。言ってみれば、気がつけばそこにいた人だったのだが、それ以来30年、玉井先生とのつきあいの濃さをグラフにすると、二次関数的な右肩上がりの放物線となり、平成21年のご退職を目の前にした今はこれ以上ないくらいの密度となっている。

思えば、優しい先輩としてずっと接してきた方が良かったのか、それとも主任教授と部下という濃密な人間関係を持ち深く知り合った現在を幸福に思うべきなのか、今となっては分からない。20歳のときの私に予知能力はなかったのだが、50歳の私に過去を脱構築する能力は同じぐらいない。ただ今実感するのは、おそらくこれしかあり得なかったのだろうという思いである。

コーヒアレントな30年の物語を構築するのが困難なので、取りあえずアトランダムに頭に浮かぶ思い出をあげてみる。和具という小さな離れ島の海

の家で夏合宿したとき大学院に誘われたこと、院生時代に東京の学会に行ったとき赤坂見附のディスコに連れて行ってもらったこと、私が言語文化部に在籍していたとき玉井先生の教え子を同僚に迎えることができ飲み連れで行ってもらったこと、文学部に移ってからの激務で体調を崩し授業を休んで阪大病院に行ったとき駆けつけてくれたこと……と列挙してみると、何かをしてもらった思い出が圧倒的に多いことに気がついた。個人的には文学部に配置換えになってからのこの10年が人生で一番忙しく大変な時期であったが、「してもらった」ことを繋ぎ合わせてみると、沈みかけの服部号を何とか浮かばせてくれていたのは、他ならぬ玉井丸であったようだ。なんだ、私は結局玉井先生には「優しい先輩として接してきた」のだ。あえて若干の訂正をするなら、先輩が上司になっただけのことである。

2010年4月からは、玉井丸は別の港を目指して出立することになる。私はしばらくの間、英文学分野を1人でやっていけるのだろうか。いや、この問いのたてかたはきっと間違っているだろう。玉井丸も服部号も所詮「阪大英文科」という母艦に偶々乗り合わせたボートに過ぎない。私は伝統ある母船にひととき乗りこんだ雇われ船長に徹し、これから10年少しを難破しないよう見張ってさえいれば良いのだと思うことにしよう。聞けばこのOLRも48号になるという。実に半世紀が過ぎたわけだ。エッセイを載せた記念号も何度目かになるが、藤井治彦先生の追悼号が1999年の38号だったから、今回はそれ以来10年ぶりになる。あのときは悲しい想いで押し潰されそうだったが、今は玉井先生が無事ご退職となるのを心から喜ぶことができる。

大阪大学文学部英文科が生まれたのが1948年だから、2009年現在で60年ほどの歴史を持つに至り、伝統のようなものもできたわけである。国立大学（法人）文学部英文科という古色蒼然とした旗は、さらなる数々の嵐にもまれて絶えず鍛えておかなければ、あえなく沈没してしまうかもしれない。束の間の船長は、難破させないだけでなく、絶えず補強する努力を怠ってはいけないのであろう。

そうそう、補強と言えば、文学部のぼろぼろの建物が耐震補強工事を終えようとしている。英文科は長年本館の北ウィング3階東側にあったが、関連部分の工事が終わって、2009年10月から同じ北ウィング4階の中央部分に移動した。学部では今は英文科ではなく英米文学・英語学専修という長い名前に変わっているが、この専修に属する教員の研究室は改築前には分断されていたが、今では一直線に集まっている。工事の最中は粉塵が舞う最悪の研究教育環境であったが、改築された今では以前に比べてかなり改善された。

建物という物理的空間が新たになった今、私たちはこの空間を新たな中身に充滿させなければならない。そして、今、玉井先生は旅立って行かれるが、これからも母艦阪大英文科は航行し続ける。この船を支えるのは、雇われ船長ではなくてOLR 同人の皆様1人1人である。これからの50年間も、母艦阪大英文科をお忘れなきよう、これまでにもまして同人の皆様のご厚誼をお願いして、雇われ船長となる者のつたない述懐を閉じることにしよう。

(大阪大学大学院・文学研究科・英米文学専攻教授)

玉井先生のこと

岡田 禎之

玉井先生、ご退官おめでとうございます。先生に初めてお会いしたのは私が学部の3年生になった時でしたので（当時は、普通講義を除いて3年生からでないと専門の授業を取ることはできませんでした）、もう25年も前のことになります。当時先生は38歳だったのだと思うと、驚きです。あの頃の先生と、今の先生の印象はほとんど変わるところが無く、いつまでも若い先生なのだということを、改めて感じさせられます。36歳で阪大に赴任されて、若いときだったから、初めのうちはいろいろと授業をするのも大変だっ

た、という話を後になって伺ったことがありますが、私が学部生だった頃はまさしくその時期に当たっていたのだと思うのですが、そんな雰囲気は全くなく、非常に余裕を持って授業をされていたという印象しかありません。一介の学生には先生の苦労というのを斟酌する気持ちなどありませんでしたから、観察眼のない節穴学生にとってはまあ当たり前のことだったのかも知れませんが。

私が先生から戴いた言葉で良く覚えているものは4つあります。1つめは、授業に関するものです。「予習や準備に時間のかからない授業は学生にも自分にも勉強にならない。」非常勤の授業に関する拘束時間を何とか短縮できないかと、安直な考えを持っていた私に、時間をかけて準備をしてこそ学生のためだけでなく、自分のためにもなる授業ができるし、またそのような教材を選ばなければならないのだ、というお話をさせていただきました。自分がよく知らない領域の教材を取り入れようとすれば、それに必要な下準備は多大なものになるけれども、それも積極的に取り込んでいかなければ自分の視野も学生の視野も広がらないし、勉強にはならないのだ、ということをお話させていただきました。先生はそのような授業を実践されて、英文学の広い領域をカバーされ、様々な批評理論にも精通されたのだらうと思います。私も少しでも多くの領域の問題を取り上げて授業を展開していけるようにと思っています（が、なかなか体がついてきません）。

2つめは学部生の時に、なぜ文学の研究をしようと思われたのですか、と尋ねたときの先生の答えです。「いろいろな先行研究を読んでみると、これくらいなら私も気づいていたなあ、私にも十分できるのではないかな、と思ったのだよ。」これには正直言って驚愕しました。私は文学の論文を読んだりしても難解なものが多く、なかなかついて行けそうにないなあ、と思っていた頃でしたので、やはりこれくらいの気概と自信がなければやってはいけないものなのだ、と思ったものでした。私は結局文学の道は諦め、語学の方へ進路変更したのですが、変な院生に付きまといられることがなかったわけです。

から、先生にとってもきっとそれで良かったのだろうと今も思います。未だにあのときに先生が仰ったような気概を持つことができずに、いじいじしている未熟な研究者のままですが、いつか先生に負けにくいらの研究に対する気概をもって臨めるようになりたいと思っています。

3つめも研究に関することですが、「流行に流される必要はない。自分の視点を大事にして着実に研究を進めて行きなさい。時流と関係ないものであっても、着実な研究であれば、必ず人が見ているものだから。」これは私が助手を辞めて岡山大学に赴任する直前に、温泉旅行先で掛けていただいた言葉でした。私は世間の流れからは外れたところで研究をしていましたし（今もそうですので、単なる天の邪鬼なのかも知れませんが）、こんな感じで続けていても良いのかなあ、という気持ちを一方に常に持ちながら、でも自分には結局こういうスタイルしかできないのだから仕方ないや、という開き直りのような、諦めのような気持ちをずっと持ちながらぐずぐずしていましたので、この言葉には非常に勇気づけられました。藤井先生にも、堅実な研究を年に1本書き続けられるかどうか分かれ目になる、という趣旨のお話をしていたのですが、お二人が言われた精神は私にとっては大切な指標でした（「でした」と過去形にするべきではありませんね）。それを目標として自分なりにやってきたつもりではあるのですが、最近特にいろいろな雑事にかまけて様々に理由を付けて、言い訳がましくしている自分がいますので、再度気を引き締めて頑張りたいと思います。

最後は「宴会部長は任せます」です。これは、私が助手になるときに先生が色紙に書いてくださった言葉です。結局、宴会部長を任せていただけるような器ではなかったために、私の助手時代は何の盛り上がりもなく、暗黒の時代だったと思いますけれども、玉井先生は常に「宴会部長」としての側面を持ち続けられ、退官されるまでその姿勢は変わらなかったと思います。これは何も飲み会で盛り上げる役目、ということなのではなく（もちろん学部学生とのコンパなどの企画の音頭取りは常に先生がやって下さっていました

が)、周りが居心地良く過ごせるように常に気を配り、声を掛け、裏方仕事をいとわずにやるという縁の下の力持ちを地でいく立場の人、ということです。玉井先生は名助手の誉れの高い人であったと聞いていますが、実際退官されるまでずっとそのスタンスは変わることがありませんでした。これはなかなか簡単にできることではないと思います。私にとってはたどり着けない目標という感じです。

こうしてみると、本当に言葉の端々に、その人のスタンスや考え方、生きる姿勢が如実に現れるものだということを痛感させられます。自分自身も「教師」という立場にいるわけですから、自分が気付かないところで、自分の言葉が他人に影響を与えてしまうこともあるのだらうと想像します。その時に、その人が求めている適切な言葉を適切な形で伝えるということができれば、その言葉はその人にとって大切な言葉になるでしょうし、後々の指標となることもあるのだらうと思います。玉井先生には様々な場面で適切な助言を戴きましたし、助けていただいたと改めて思います。

玉井先生、本当にお世話になりました。有り難うございました。今後とも頼りない後輩をお導き下さいますように、厚かましくもお願い申し上げます。そして、若いままの先生がこれからどうなっていくのかを、後学のために観察させて戴ければと思います。どうぞいつまでもお元気で。

(英語学専攻准教授)

玉井先生の存在の大きさをめぐるとりよめのない回想と思索

片 瀧 悦 久

僭越ですが、まずはこう書きたいと思います。玉井先生はとても頼りになる師匠、同僚、先輩です。大学院生として英文研究室の一員となった20年前からその思いは変わりません。先生の変わらぬ若々しさとリーダーシップは、私の理想の研究者、教育者の模範です。同僚にさせていただいた7年間、先生から少しでも多くのことを学びとろうと努めてはきたつもりですが、私自身はどうもあまり向上していません。そうこうしているうちに、先生が研究室を去られる時が近づいています。次代を担う責任感をいよいよ自覚しないわけではありませんが、正直なところ先生の存在に安心し、甘え学ばなかった自分の愚かさを痛感しています。あと5年、せめて3年、いや1年でもかまいません。教わりたいことがいくらもあるのです。研究室、研究科、学内外、学会組織とのかかわりなどのもろもろの事情、何でもいから学ばせてください……などと考えるあたり、つくづく私はのんきな人間です。

この文章は玉井先生との思い出をつづる特別企画にもとづく文章となるべきものです。そこで求められるのは、院生時代あるいは／また同僚として先生と過ごした研究室の日々の記憶をかたちにすることであるはずですが、私の文章はおよそ回想録の体をなしていませんと最初に弁明しておきます。もっとも、こうしたとりよめのなさこそ実は、少なくとも私にとっては玉井先生が退職されるという事実が与えるインパクトの強さなのです。前置きが長くなりましたが、以下ではあくまで断片的に1989年から2009年までの思い出を我流に回想し、そこに無軌道な思索を付け加え、私にとっての玉井先生の存在の大きさを語りしたいと思います。

まずは私が院生時代（1989年～95年）のことを書きます。私は都合6年間英文研究室に在籍しました。玉井先生の院演習は欠かさず参加しました。九州の片田舎から出てきた私が、右往左往しながら、洗練された文学研究の世界と華麗なる批評理論の数々を学んでくれたのはひとえに先生のおかげです。演習の中味は文学理論アンソロジーの論文などを要約しコメントを加え、それに全員でディスカッションするというものでした（今でもその方式は変わっていないはずです）。文学理論にはそれまでまったく無頓着で素朴な読みばかりだった私は、先生の演習授業でいろいろな方法論があることを知り、文学研究の基本を教わったと思っています。もっとも、しみじみ思い返せば充実した楽しい授業でしたが、当時の心境は、たとえ発表者に当たってなくても、必ず思いがけずコメントを求められ内心戦々恐々でした。それと、これはぜひ付け加えておきたいのですが、先生の院演で学んだことがその後の私の研究生活に生きています。とくに物語言説の特質を中心にソール・ペローや他のユダヤ系文学を読むアプローチのしかた、またこのところ科研で取り組んでいるアダプテーション理論と物語更新についての研究は、すべてM2のときの院演テキストの *Seymour Chatman, Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film* (1978) がきっかけになっているのですから。ちなみにこのときの演習メンバーが玉井先生を中心として同書の翻訳に取り組んでいます。院生時代の思い出をかたちにして残すためにも、何とか出版を実現させたく思います。お願いします。

研究のことで思い出したことがあります。M2のときですが、初めて学外での研究発表を経験しました（支部例会）。今思えば、あまりに無謀な挑戦でした。どれだけ身の程を知らなかったのでしょうか。しかし、先生はそんな私を叱りもせず、ありがたくも個人的に予行演習（発表原稿の読み上げ）の機会をくださいました。談話会でのリハーサルが一般化してはいなかったころです。先生の研究室で一對一だったと記憶しています。お忙しかったのではないかと思います。時間を割いていただいて、時間配分や引用の読み方

などの助言をいただいたのを覚えています。

もうひとつ研究指導のエピソードを思い出しました。論文執筆の初期段階で指導を受けたことがありました。たしかD2の終わりでした。学会誌への論文投稿に私は行き詰っていました（すでに連続して審査に落ちていたからです）。そこで、私は独自の論文作法を編み出そうと考え、当時談話会で実践されていた「論理運行表」（研究発表のアウトラインを短文の連続で提示するものです）を応用し、論文内容のアウトラインをトピックセンテンスの連続と積み重ねとして書いてみることにしました。これを持参して玉井先生にご指導をお願いしたのです。きまぐれな思いつきなのですが、うれしかったのは、先生が（ちょっとあきれ顔だったかもしれませんが）、お忙しい中にもかかわらず気さくにつきあってくださり、時間をかけていねいに内容と論旨を細かに点検してくださったことです。そして励ましの言葉とともにゴーサインを出してくださったことが、自信をなくしかけていた私をどれだけ勇気づけたことでしょうか。ちなみに、これは翌年私自身最初の学会誌掲載論文となりました。そしてこの論文作法を今でも自分のやり方として実践していることもいうまでもありません。（研究の面で先生に励ましていただいたことはほかにいくらかあるのですが、割愛します）。

さて、1995年に幸運にも専任職をえた私は英文研究室を巣立ちました。ただ阪大自体から完全に離れていたのは2年間で、97年度からは言語文化部の非常勤講師になりましたが、いちばん光栄だったのは99年度からは文学部の英語の非常勤講師をやらないかと玉井先生に声をかけていただいたことです。ありがたくも同僚とさせていただいたこの7年間は、文学研究科また英文研究室の一員としての心がまえなど薫陶いただきました。博士論文の執筆中も励ましの言葉をいただきました。また私の個人的家庭の事情についても心配していただきまた相談にも乗ってくださいました。結婚や家庭、人生について先生が気さくに語って聞かせてくださったことも忘れられません。人生には順調なこともあれば、思いどおりにならないこともたくさんある。

自分で進むべき方向を見つけたら、それを信じて前に進むのがよい。そのような内容の言葉をかけてくださったことがありました。ありがたい励ましの言葉でした。

私にとって玉井先生はかけがえのない師匠、同僚、先輩です。そう言える自分を誇りに思い、これからも謙虚に、のんびりしすぎないように、英文研究室を支えていかなければと思います。要領がわるく頼りない私には自信がないのですが、やるだけやってみようと思います。などと書いているそばから、さきほどもまた先生に励まされてしまいました。どうも私は何につけのんきに構えてしまうようです。そのあたりもふくめ、玉井先生、これからもどうかよろしくご指導お願いいたします。

(英米文学専攻准教授)

Paradise Lost Book Seven

Paul A. S. Harvey

In gratitude for ten years of support at the Faculty of Letters, and in recognition of a friendship of twenty years, I offer this short essay to Professor Akira Tamai, on the occasion of his retirement.

It is often said that one should read the first two books of *Paradise Lost* and forget the rest. But after teaching Book Seven for the first time, I find that in its own way, it may claim to be just as good as the earlier more widely-read verses. (Biblical passages quoted from KJV, Milton from Fowler, Longman second ed.)

The Book treats the creation of the world and is narrated by the

archangel Raphael to Adam. Milton's task is to give the first chapter of Genesis sufficiently sublime treatment and also to render it dramatically interesting at the same time. He does this by following orthodox Christian teaching, making Christ, as the word of God, the active agent of creation.

So spake the almighty, and to what he spake
His Word, the filial Godhead, gave effect (7.174-5).

He brings the beginning of the gospel of John (1.3), and verses from the Letter to the Hebrews (1.2), to Genesis 1.

In an analogical parallel to the defeat of Satan, Christ rides forth once more in glory, the creation to replace the loss of the apostate angels. The first creative statement is not, however, what we expect:

Silence, ye troubled waves, and thou deep, peace,
Said then the omnific Word, your discord end (7.216-7).

Christ is given the title "omnific Word" (all-creating word), and he commands chaos to resolve itself in peace. He rides into chaos on the cherubims, and then takes the golden compasses and begins creation. This highly symbolic moment was later made famous by William Blake in one of his best paintings. Milton took the image from a reading of Proverbs 8.27, interpreted to refer to creation. This is a wonderful passage and Milton is clearly inviting us to remember it. In it, Wisdom describes her origins, and the church fathers interpret this as the voice of Christ:

"I was set up from everlasting, from the beginning, or ever the

earth was. When there were no depths, I was brought forth. . . .
 When he prepared the heavens, I was there: when he set a compass upon the face of the depth." (Prov. 8.23-27)

"He" in this passage is God the father, but in *Paradise Lost* it is Christ.

He took the golden compasses, prepared
 In God's eternal store, to circumscribe
 This universe, and all created things:
 One foot he centred, and the other turned
 Round through the vast profundity obscure,
 And said, "Thus far extend, thus far thy bounds,
 This be thy just circumference, O world." (7.225-231)

This is therefore the second creative command, pre-dating the commands recorded in Genesis. Christ thus describes a great symbolic circle within which the world will be created, the circle an ancient symbol of perfection. Milton was familiar with the advances made in astronomical knowledge, so he knew that all this was poetic fiction. It is a divine teaching: this is the principle of the whole poem. Mortal understanding cannot attain such matters, so it has to be told in a metaphorical way that we can understand — "told as earthly notion can receive."

Then follows Genesis, Milton quotes directly from the Old Testament: "Let there be light." These are magnificent lines:

Let there be light, said God, and forthwith light
 Ethereal, first of things, quintessence pure

Sprung from the deep, and from her native east
 To journey through the airy gloom began,
 Sphered in a radiant cloud, for yet the sun
 Was not; she in a cloudy tabernacle
 Sojourned the while. (7.243-249)

Ethereal comes from the Greek, used as an epithet for heaven (meaning the highest region and purest element). Quintessence from Latin, meaning the very purest essence. Both these words were associated with alchemy, and used in English renaissance poetry to heighten the style. Light is created before the sun, and this requires poetic explanation. Milton turns to the King James translation of the Psalms, placing light within a cloudy tabernacle (Ps.19.4), which is a tent, using the verb "sojourn"—both words strongly associated with the Old Testament. There's a hint also of the Exodus pillars of cloud and fire which led Israel from Egypt. The passage is therefore a blend of Biblical reference and Renaissance learning.

Milton again quotes the King James, "Let there be a firmament amid the waters." Chaos is thus ordered into heaven above and waters below (firmament came from the Vulgate translation of the Greek word for the heavens, in modern translations this is now "dome" or "vault"). Milton then chooses a modern astronomy, making heaven an airy expanse, rather than the old crystalline sphere of Ptolemy: "expanse of liquid, pure, transparent, elemental air." Liquid is not now used to refer to air but it was so used in this period.

Milton then poeticizes the creation of earth, personifying it in terms of the human body: the waters are a womb, with warm humour softening the globe, a great mother who will conceive all. Then follows the

third command, which quotes King James indirectly, "Be gathered now ye waters under heaven into one place, and let dry land appear." The following sections are particularly successful in their depiction of animated movement: the mountains rise out of the waters, valleys sink down, the waters roll away like troops at command, rivers are carved out.

Then follows the fourth command, "Let the earth bring forth grass," which Milton adapts to, "Let the earth put forth the verdant grass," which is more forceful, and continues the animated creation of the previous verses. The earth then dresses herself in green, and is carpeted with flowers. The creation of the trees is particularly good: "last rose in dance the stately trees, and spread their branches hung with copious fruit." With the creation of vegetation, "earth now seemed like heaven, a seat where gods might dwell, or wander with delight, and love to haunt her sacred shades." This is an important statement: the earth was created to compensate for a loss in heaven, or to be for a while another heaven, later to be heaven's antechamber. The gods Milton mentions are at first the angels and archangels who visit Adam and Eve before the Fall; later these will be the myriad gods and goddesses of classical antiquity, whom fallen man believed to inhabit mountain and grove.

Then follows the fifth command, which is the creation of the heavenly bodies, the sun and moon. Here Milton follows Genesis closely, but in this passage his wordy version is decidedly inferior to King James. The fifth command is a great passage, and provides me with a convenient place to conclude my brief discussion, and to say thank you once again to my colleague Professor Tamai.

God said, Let there be lights in the firmament of the heaven to divide the day from the night; and let them be for signs, and for seasons, and for days, and years: And let them be for lights in the firmament of the heaven to give light upon the earth: and it was so. And God made two great lights; the greater light to rule the day, and the lesser light to rule the night: he made the stars also. And God set them in the firmament of the heaven to give light upon the earth, and to rule over the day and over the night, and to divide the light from the darkness: and God saw that it was good. (Gen. 1.14-18)

(英米文学・英語学専攻講師)